

理学部附属 植物園のいきものたち 第13回



▲写真1 ヤマコンニャク

京大植物園では、熱帯や亜熱帯で繁栄するサトイモ科植物のいくつかが生野生化しています。近年の京都の気候は亜熱帯とまがうほどに高湿度で気温も高いですが、サトイモ科の勢いのよさと関係があるのでしょうか。

サトイモ科の花は独特で、筒状または舟状の仏炎苞(ぶつえんほう)という器官が花序(花の集まり)をおおいます。多くは腐臭を放ちハエの仲間を呼びよせて花粉の媒介を担わせます。ミズバショウやザゼンソウは例外的に寒い地方に分布し、自生地が観光地化することもあるようです。「カラー」や「ポトス」なども観葉植物としておなじみですが、これらもサトイモ科に属し、前者は南アフリカ原産、後者は東アジア原産で日本でも琉球などに自生しています。

写真1(上): ヤマコンニャク

名前の通りコンニャクの仲間で、地下には大きな塊茎ができるそうです。低地の常緑林下に生えるとされますが、野生のものは珍しいようで保育社の「原色日本植物図鑑」や平凡社の「日本の野生植物」のいずれも京大植物園の花を材料に記述しています。この植物園では本当に旺盛に繁殖していて、園内のいたるところに花があり、また美しい深青色の実もつけます。花が咲く時期には葉がなく、果実が出来たころに1枚の葉が地上に現れます。



▲写真2 ムサシアブミ

写真2(下): ムサシアブミ

テンナンショウ属のなかでも仏炎苞の形が独特で、それを武蔵国で作られた鐙(足踏み)に見立てたといいます。一つの株から2枚の葉と1つの花序を出しますが、葉が3裂(3つに分かれる)であることも他のテンナンショウ属植物と異なります。低地や海岸近くの常緑林下に生えるとされるこの植物が、カンサイタンポポと一緒に花を咲かせるのも京大植物園ならではでしょう。

これらサトイモ科が植物園に豊富なことは、林が成熟し林床(地面)に直射光があたりすぎず乾燥が押さえられていることと関係があります。地面がアスファルトで舗装されて乾燥しがちで、直射光にさらされることの多い「都市」の中にありながらこのような環境が維持されていることこそ、京大植物園の特徴だといえます。むやみに枝を払ったり草を刈ったりして今の環境の良い面を失ってほしくないものです。